

「新用水」成立の謎に挑む

佐伯安一

- 一 はじめに
- 二 近世の追加用水
- 三 近世初頭の原況とそれ以前
- 四 元禄二年、三清口分水口の立ち上げ
- 五 寛保五年(延享二年)の雪舟田懸樋
- 六 昭和前期の改修工事
- 七 結語

一 はじめに

「新用水」は、庄川の扇頂部から取り入れて、南砺の井波町辺りを灌漑する用水である。この辺りは、庄川扇状地のうちでも自然流の及ばない高位の地帯で、水位九メートルから九五メートルの間の等高線をたどって北東から南西へと流れている。そのため、俗に「サカシマ川」とか「尻高用水」と呼ばれた。昔は、下流では三間二尺(六メートル)も高いときえ言われた(武部仁九郎翁功績碑)。そのため、幹線からの分水の仕方は、両側ではなく低い北側へだけ通水するので、縄のれんとか、寝そべった親豚の腹で子豚が群がって乳を飲んでいるようだ⁽¹⁾と表現されている(井波町史上巻)。

取入口は、砺波市庄川町金屋地内、合口ダムから一キロほど上流の字台渡銚子⁽²⁾というところである。ここで庄川は大きく曲流して左岸

へぶつかるように流れ、河中には赤岩という鳥状の岩があつて、自然流下水を巧みに取り込む地形になつている。字名の「銚子」というのも、銚子から注ぐように水を取り入れることができる場所という意味で、天然の取入口と言つてよい。しかも、庄川兩岸八用水の最上流にあるので水利権も強かつた。開削は鎌倉時代と言われているが、少なくとも中世末には開かれていた。

他の用水は近世に入つて整備されたので史料が多く、整備の道筋がつかみやすいが、新用水は開削当初の史資料がなく謎の用水とされてきた。しかし、近世末の状況を見ると、近世に入つてから追加されたものが多いので、その錯綜した状況を整理して近世初頭の原況に戻し、中世の姿を探る手がかりとしたい。

二 近世の追加用水

まず、天保十年（一八三九）の江高の内訳をみると表1のようである。⁽²⁾ 合計六千九一七石余で、俗に七千石用水と呼ばれた。ここには、坪野口・三清口・示野口・岩武口・山見八ヶ口の五口の分派用水がある。

このうち、山見八ヶ用水（これも、中世起源の伝承をもつが、新用水より大分あとである）は、取水が困難になって、宝永七年（一七一）に新用水の分派用水として編入されたものである。

示野口と岩武口は、新田開発のために新用水の水を利用したものである。まず示野口は、庄川扇頂部左岸第二段丘の示野と称する野を新開するために引水したもので、金屋岩黒村・示野新村（明暦二年 一六五七 一村立）⁽³⁾・松林村（延宝五年 一六七七 一村立）⁽³⁾・高儀新村（寛永二年 一六四三 一村立であるが、この水を利用したのは後年である）⁽³⁾の五か村で、江高は合計六一三石余である。

岩武口（岩武新用水）は、旧野尻川の本流跡（主に川除新村）の左岸に沿う細長い地で、近くに岩武雄神社があるので岩武野と呼ばれていた地を灌漑する。ここは、改作政策の完了した少し後の天和二年（一六八二）⁽³⁾、砺波郡の十村たちが連名で新開の許可を得、周辺から請作人を募って開発に着手したところである。当初の新開高は五四三石余、以後累増して天保九年（一八三八）には九九石までになり、この間、天保五年（一八三四）に一村立になった。⁽³⁾ 草高の大半は野尻口であり、岩武口の江高は二九六石余である。

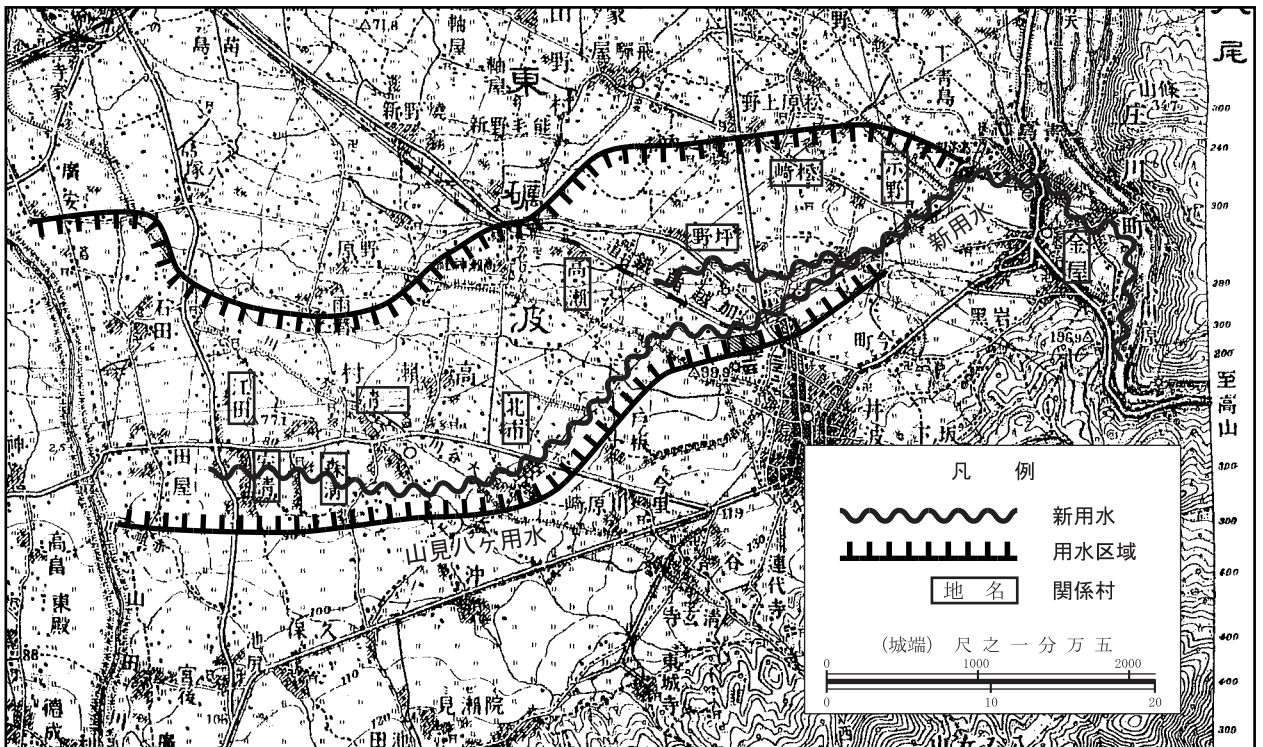


図1 新用水主流部概図

三 近世初頭の原因とそれ以前

以上の山見八ヶ・示野・岩武野の三口を除いた坪野口と三清口が近世初頭の新用水である。

「坪野口用水并三清村用水」の用水名の初見は寛永九年（一六三二）三月、砺波郡の郡奉行原五郎左衛門から北市村作兵衛等関係十村へ普請の平夫を申し付けた文書である。⁽⁴⁾

以上

追而申遣候、右之平夫明日六日夕坪野

口へ急相詰候様ニかたく可申付候、以上

坪野口用水并三清村用水道普請之儀平夫申付候間、各与⁽⁵⁾下中々人足半年⁽²⁾懈怠無之様ニ可被申付候、毎日出人着到ニ詰村肝煎可致加判候、則御奉行として御鉄砲衆南部七兵へ遣候間、可成其意者也

寛永九年 申 三月五日 原五郎左衛門尉（花押）

二郎丸村

左次兵衛

北市村

作兵へ

高儀付

半左衛門

井波町

長左衛門

江高の最も早い資料は、明暦元年（一六五五）である。⁽⁵⁾

明暦元年庄川水当所々

一、四千三百四拾五石 坪野口六ヶ村

この坪野口には、そこから取水した三清口も含む。六ヶ村はどこであるか。表1の江高表によると、坪野・高瀬・北市・三清で九七%を占めているから、この四か村が基本である。あと二か村は、明暦元年段階では、松崎村と高儀新村であるが、高儀新村は、この用水が主体では

表1 新用水の江高（天保10年）

村No.	村名	坪野口	三清口	示野口	岩武口	山見八ヶ	計	天保12年村高(参考)	一村立
261	坪野	909.730					909.730	910.000	
263	高瀬	1,625.000				70.000	1,695.000	1,775.000	
256	松崎	40.000					40.000	56.200	
257	松林	6.500		99.180			105.680	111.000	延宝5年(1677)
253	青島	68.000					68.000	679.000	
333	高儀新	24.500		1.100			25.600	755.700	寛永20年(1643)
276	庄新	3.000					3.000	249.000	寛文10年(1670)
133	北市		1,040.000			120.000	1,160.000	1,190.000	
130	三清		750.000			20.000	770.000	1,162.000	
129	森清		120.000				120.000	510.400	
128	安清		120.000				120.000	637.000	
116	江田		99.999				99.999	331.300	
252	金屋岩黒			71.770			71.770	763.729	
254	示野新			204.190			204.190	375.500	明暦3年(1657)
255	示野出			237.650			237.650	287.000	延宝5年(1677)
228	岩武新				296.910		296.910	990.000	天保5年(1834)
250	北川					75.000	75.000	320.000	
262	山見					380.000	380.000	1,057.000	
134	戸板					170.000	170.000	314.000	
136	今里					95.000	95.000	268.000	
132	川原崎					90.000	90.000	308.000	
131	沖					180.000	180.000	670.000	
計		2,676.730	2,129.999	613.890	296.910	1,200.000	6,917.529		
		坪野口分		示野口分					
		4,806.729			2,110.800				

史料：川合文書「砺波郡諸用水江高帳」

ない。明暦三年一村立ての示野新村もそろそろ利用し始めていたかもしれない。

ついで、寛文十年（一六七）御扶持人十村戸出村又八からの書上げには次のよう⁽⁶⁾にある。

一、四千五百拾七石三斗九升壹合 坪野口

高瀬村甚左衛門、万治貳年々々用水肝煎仕候、給銀拾五匁、半分ハ壹軒ニ壹分七厘宛取申候、半分ハ高百石三分五厘貳毛取申候、持高指除如斯、持高百五拾壹石外ニ式拾八石壹斗四升貳合、坪ノ用水不仕候、所々用水御用之時分ハ一日壹匁宛遣取申由、うへノ木井用水家高一軒指除、給銀ノ外たわら八居村ニ而指引仕候、三清村与次兵衛、寛文六年用水肝煎仕候、給銀諸事右同事、持高百拾石、外五拾七石九斗七升八合、清水懸り引く

江高四千五十七石余は明暦元年より一七二石増えている。いずれも「新用水」ではなく「坪野口」とあることに注目しておきたい。

坪野口と三清口のうち、最初に引かれたのは坪野口であろう。三清口の北市・三清へ引水するためには自然流の東大谷川を越えねばならぬからである。最初に引かれた坪野口の灌漑域は、高瀬と坪野である。

^(表2)この地域の開発をみると、まず、式内社高瀬神社の存在で、八世紀末の宝亀一年（七八）に従五位下に叙されたのが初見（続日本紀）である。ついで、九世紀前半の高瀬遺跡がある（ここは、東大谷川より南であり、当時の灌漑水は、発掘状況からみると八乙女・大寺山の谷から出る自然流の勤行寺川であつた）。また、延喜式大学寮条にある砺波郡大学寮田は、高瀬の小字名「勸学院」に比定されている。高瀬神社を中心に成立したのが高瀬荘で、荘園名の初見は平安時代末の仁安三年（一一

表2 高瀬荘の古代中世

年	事	項
780 宝亀11	高瀬神社が従五位下に叙される	(貞観元年 (859) 正三位)
9 C 前半	高瀬遺跡	
927 延長 5	延喜式大学寮条に砺波郡大学寮田(墾田18町余)がある	(高瀬の小字勸学院に比定)
1168 仁安 3	高瀬荘の初見	(安楽寿院目録)
1334~ 建武年間	足利尊氏が高瀬荘領家職を東大寺八幡宮に寄進する	
1342 康永 1	足利尊氏が高瀬荘地頭職も東大寺八幡宮に寄進する	
1344 康永 3	荘田126町余	(高瀬荘田地目録)
	このころ、早くも在地地頭の押領が始まる	
1380 康暦 2	地頭方代官職	下長五郎左エ門初見
1414 応永21	預所職	手搔法師叡春、代官職補佐 下長五郎左エ門
1430 永享 2	下長五郎左エ門代官に復帰～収奪を強化	
1436 永享 8	庄民が下長の改易を要求して逃散	
1460 長祿 4	守護方より地頭方年貢の糾明を命じる	
1481 文明13	地頭方所領の百姓が郡内で土一揆を企てた	
1536 天文 5	高瀬庄の定使が地頭職を瑞泉寺の寺内の者に売却して遂電	(東大寺が善処を本願寺証如に要望)

(参考『富山県史通史編古代』ほか)

六八)、安楽寿院領目録である⁽⁷⁾。その後、一四世紀の建武年間(一三三四～)には足利尊氏は高瀬荘領家職を東大寺八幡宮に寄進し、康永元年(一三四二)には地頭職も同社に寄進して、同三年の東大寺領高瀬荘田地目録⁽⁸⁾によると、荘田は一二六町余であった。そして、この頃には早くも在地地頭の押領が始まり、また、永享八年(一四三六)には、代官の改易を要求した逃散があつた。その後、戦国時代には一向宗徒を中心とした在地農民が主体となつている。以上のような経過の中でいつ用水が引かれたかは不明である。

ここで一つ留意しておかねばならないのは、高瀬神社の社地や律令時代に大学寮勸学院田が置かれたという勸学院田跡(小字勸学院)が東大谷川の手前にあることである。用水がこれを越して高瀬村の南域や北市・三清へ延伸したのは、次の段階であつたらう。それでも、先述したように、寛永九年には三清村用水があり、明暦元年の江高には三清口の分も含まれているところからみると、この延伸も中世のうちに終わっていたことを確認しておきたい。

なお、新用水が自然流の東大谷川、後に西大谷川と交叉する方法は、現状および五万分の一図では用水が下を潜るサイフォン方式であり、享和三年(一八一三)の「砺波郡用水仕法書⁽⁹⁾」も同方式の「貫樋」としてあるので、当初からこの方法であつたと思われる。また、用水開削以前、自然流の東大谷川はどのように利用されていたであろうか。具体的に考えてみる必要がある。

四 元禄二年、三清口分水口の立ち上げ

東大谷川を越えて延伸した三清口も、等高線をたどるので通水が困難であつた。これを緩和するために行われたのが元禄二年(一六八九)の分水口立ち上げである。明治十二年、高瀬村江下総代富智見寛四郎から砺波郡長へ報告した「字新用水旧慣法」に次の一項がある。

一、字新用水分水口三清五ヶ用水ノ義八⁽¹⁰⁾、往古北市村三清村二ヶ村ノ用水ニシテ、坪野村字十割坪ト申所ヨリ取分ケ来リ候処、尻高用水ニシテ流末早損候二付、元禄二年示野新村字三ツ屋ト申所へ取分ケ口ヲ立揚ゲ、其後、森清村・安清村・江田村相加リ申候。

分水口は、当初坪野村地内松田正司宅脇(図2の甲地点)であつたが、少しでも高いところから取水するため、約一キロ上流の現在井波の雇用促進住宅の少し東側(図2のA地点)まで引き上げた。現在、両地点とも地藏堂が建つている。そして、東大谷川を越す地点は、坪野村の「字十割坪(図2の乙地点)から現在の場所(図2のD地点)へ移つたのである。D地点は、現在の総合文化センターの北の東大谷川に架かる橋で、乙地点より一メートルあまり上流である。

つまり、水路は、従来甲地点から乙地点であつたものが、A地点からD地点へ移つたのである。説明の便のため、従来の水路を「下ルート」、新しい水路を「上ルート」と呼んでおこう。そして、この上ルートを「新用水」と呼んだと思われる。それが、後には坪野口・三清口の総称として「新用水」と称するようになったのである。これについては、次節で再述する。

ところで、三清口の改良に近世を通じて力を尽くしたのは、三清村住の十村武部氏である。自村を含めた近辺は、南砺山麓から流れ出る自然

流諸川の末端で、赤祖父水郷の水も受けていたが、いつも水不足に悩んでいたからである。三代与次兵衛は、寛文六年（一六六六）から坪野口の用水肝煎を勤め（前記）、寛文十二年から延宝三年（一六七五）まで能美組の十村に任じている。倅の四代与五郎は、続いて享保三年（一七一八）まで十村を勤めており、元禄二年の上ルート造成は、この四代与五郎の任期中であった。そして、三清口はこのあと、西大谷川を越えて森清・安清・江田の三村（三四石）まで延伸したのである。次節で述べるように、延享三年（一七四六）の野尻岩屋口が新用水へ合口した事件のときは、七代仁九郎の代であった。

五 寛保五年（延享二年）の雪舟田懸樋

寛保五年（延享二年 一七四五）に当たる、坪野村の字雪舟田（山見村との境、図2のC地点）で新用水に一三か所の懸樋を架けて、それより上の落水を下字五反坪へ通す工事が行われた。現在の井波総合文化センターの北側の道路に北接する辺りである。坪野村文書に次の史料がある。⁽¹¹⁾

覚

一、長 式間 幅 八寸 高サ五寸

上々一番 但沢田々沢田 通り樋

一、長 壹丈 幅 五寸四方

同 式はん 同 断

一、長 貳間 幅 八寸 高サ四寸

同 三番 同 断

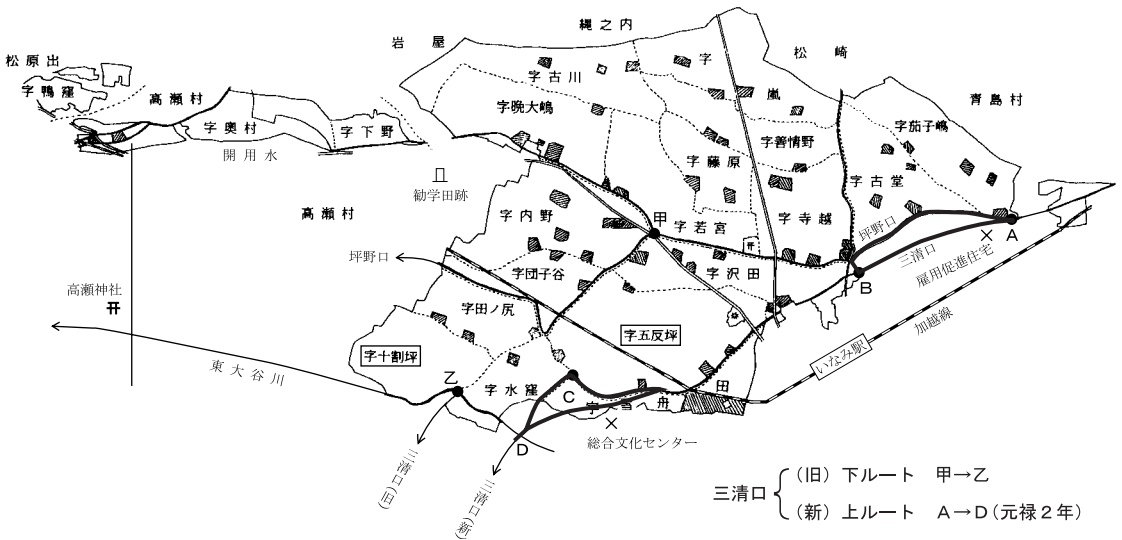


図2 坪野村の新用水関係図

一、長 式間	幅 六寸四方				
	同 四番	同 断			
一、長 式間半	幅三尺七寸	高サ壹尺			
	同 五番	そり田々五反坪	通りとい		
一、長 式間半	幅 五寸	高サ三寸			
	同 六番	同 断			
一、長 式間四尺	幅 一尺七寸	高サ壹尺			
	同 七番	同 断			
一、長 式間半	幅 五寸	高サ四寸			
	同 八番	同 断			
一、長 三間	幅 壹尺五寸	高サ九寸			
	同 九番	同 断			
一、長 式間	幅 五寸	高サ四寸			
	同 拾番	そり田々長表江	通りとい		
一、長 式間半	幅 六寸	高サ四寸			
	同 十一番	同 断			
一、長 壹丈	幅五寸	高サ三寸			
	同 十二番	同 断			
一、長 壹丈	幅五寸	高サ四寸			
	同 十三番	二反田々塩かい	通りとい		
拾三本					
右懸樋腐損シ申次第三清用水下々案内有之候得急度相渡可申候、以上					
寛保五年二月					
	三清村 印				
	北市村 印				

坪野村百姓中

(坪野村文書)

五反坪の地は、上ルウトが通る以前は雪舟田を通じて、それより高位の落水(山見八ヶ用水のおたれ水と、こやし水である井波町場の生活排水)を受けていたのだが、上ルウトによって遮断されたので、従来の用益権を重んじて樋を架けて通水したものである。この地の条件をよくすることは、三清口への通水を守ることにもなったから、今後架け替えるときは三清口側で負担すると念書を入れているのである。上ルウトは元禄二年にできているが、寛保五年時にはこの部分でさらに上へ上げたのかもしれない。取り付け部(地点)が不自然な直角なっているからである。なお、寛保の年号は三年までで、五年(文書の写真で確認)は、延享二年に当たる。

年代的背景として重要なことは、この時期が野尻岩屋口用水の取入口を新用水へ合口した事件の渦中に重なっていることである。この案が、藩から地元へ示されたのは寛保三年(一七四三)で、新用水側の反対を押し切って、翌延享元年に着工、同三年に完成した。その反対ムードの中で坪野村側は、五反坪の用益権を主張したのである。

また、この時期の武部十村は、七代仁九郎であった。寛保元年(一七四一)に六代の兄与五郎が亡くなり、同三年三月の反対陳情は、「三清村与五郎跡組才許」として戸出村又八が行なっているが、同年十二月から仁九郎が継職している。民政に尽くし、用水の改修と天明飢饉時の減

租嘆願の功で、没後百年祭の行われた明治二十七年（一一二年目）に「武部仁九郎功績碑」が建てられている。その碑文の中に、今より百七十余年前に尻高の逆流灌漑に成功された」とあるが、建碑時から一七余年前は享保十年（一七二五）以前で、仁九郎はまだ七歳以前であるから、これは当たらない。上ルートの完成は、元禄二年であるから、これもつじつまが合わない。恐らく延享二年の懸樋工事や同三年の合口など、三清口維持の苦勞をこのように表現したのであろう。

ところで、「新用水」の呼称の初見は、『三石用水史料』によると寛保元年（一七四一）であり、ついで取入合口に対する地元からの意見書にある寛保三年二月である。前記したように、元禄二年に作られた上ルートを新用水と呼んでいたのが、この時期には全流路を指すようになっていたものと思われる。呼称の初出の遅いことについては、『庄川合口用水史』の編者山森今人氏も疑問とされ、「このころから新用水と呼び始めたのか、あるいは、それまでの俗称であったものが公称となったものか疑問を残しておく」と書いておられるが、これで解決したわけである。今まで、庄川より分水して通水工事を施した初めての用水だから新用水と名付けたと言われ⁽¹²⁾ていたのは、訂正しなければならない。

六 昭和前期の改修工事

雪舟田の屈曲の直線化

昭和前期に、新用水では二つの改修工事が行われた。まず、昭和九年にC地点の雪舟田の直角屈曲の直線化が、井波町山見の耕地整理事業の一部として行われた。現在の井波総合文化センターの北側辺りである。ここは、五節で述べた雪舟田懸樋工事のときの不自

然な直角屈曲の場所で、流水をスムーズにするために直線化が行われたものである。

坪野口と三清口平行部分の一本化

元禄二年、三清口の分水口をA地点まで立ち上げて上ルートを作った結果、A地点からB地点まで約五メートルは三清口と坪野口は平行することになり、増水時にはこの間が溢水したので、坪野口水路を廃して三清口水路に一本化した工事である。県営灌排事業用水路工事として昭和十五年に着手、十六年に竣工した。坪野口は逆にB地点で三清口から分水することになり、旧坪野口は平行部分の排水の役目だけを果たしていたが、昭和四十年代後半に行われた圃場整備によって姿を消した。その結果、坪野口の名残りは坪野神明宮前から清雲勇三宅脇までの三メートルほどだけになってしまった。

神明宮後ろの謎の水路跡

『坪野村史』⁽¹¹⁾付図の耕地従前図を見ると、坪野神明宮の後ろ（北）に廢川跡を開いたと思われる細長い水田が連なっている。それは、東は旧坪野口のA地点とB地点の間から始まって宮の後ろを通り、井波福野往來の北に沿って続く。幅約三メートル。水田化は近世に入ってから行われたものであるが、集落の中心部を貫くように西流するこのルートは、どこを灌漑するためであったろうか。集落の西に旧高瀬駅辺りまで長く連なる飛び地のためのもか（今は、開用水による）、高瀬村の字勸字田へ向かったものか、疑問を残しておく。いずれにしても、旧坪野口開削以後のものである。

七 結語

以上によって、近世以降の変化を捨象して中世末の原況を明らかにすることができた。しかし、作業はそこで止まり、中世以前の開削状況まで遡ることはできなかった。標題を「挑む」としたのはその故である。今後の解明の糸口としていただければ幸いである。

ただ、中世の用水の場合、開削の主力は何であったかを考える必要がある。そのキーワードは「勸農」である。勸農政策は古代からあるが、中世について言えば、荘園領主が耕地を満作させるために果たす行為一般を言う。その中で用水の確保はもっとも重要なものであった。これを高瀬荘に即してみると、立荘以来領主の把握がしつかりしていたのは鎌倉時代までである。南北朝時代になると地頭の押領が始まり、室町時代は在地の農民の力が強まって年貢の収納が困難になる。こうした流れをみると、領主側の勸農政策であるとするれば鎌倉時代であり、農民の力によるとすれば一五・六世紀ということになる。想定できるのは、高瀬荘の中心である東大谷川までは鎌倉時代で、それを越して北市・三清まで延びたのは、一五・六世紀と考えることもできる。

近年、南砺山麓の用水事情は大きく変貌した。昭和五十年十月に起工した「県営かんがい排水事業庄川地区」は四半世紀の歳月を重ねて平成十一年に完工⁽¹⁴⁾した。その間、昭和五十五年には庄川かんがい共同用水路が通水して、庄川町や井波町の市街地は生活排水を受ける上部水路と農業用水の暗渠管路の二階建て水路構造となった。さらに、昭和四十七年に小牧ダムから取水していた南砺山麓補給用水に山見八ヶ用水区域の用水量の一部を上乗せし、閑乗寺山の下をくぐって松島浄水場の横へ抜け、潤沢な水を供給するようになった。

庄川の水を八乙女山の下をくぐらせることは、明治時代に大矢四郎兵衛が提案しているが、今、一世紀ぶりに実現したことになる。岩倉政治が『村長日記』に描いた南砺山麓の水不足の怨念は、もう昔語りになった。

注

- (1) 庄川沿岸の用水について私が検討を加えたものに次のようなものがある。千保柳瀬合口用水史編纂委員会『千保柳瀬合口用水史』同用水土地改良区 平成十二年十月
- 佐伯安一「庄川・小矢部川水系の用水」『近世砺波平野の開発と散村の展開』桂書房 平成十九年十月
- 佐伯安一「野尻野南部の開発と岩屋口用水」『砺波散村地域研究所研究紀要』第27号 平成二十二年三月
- (2) 天保十年九月、砺波郡諸用水江高帳「川合文書 富山大学附属図書館蔵 庄川沿岸用水の江高帳には、これ以前のものに次のようなものがある。天明二年四月「砺波郡庄川筋用水井山方清出用水湯高覚帳」竹部弥平次文書 684 砺波郷土資料館蔵
- 寛政十二年「御郡用水方諸覚書」川合文書 富山大学附属図書館蔵
- 文化十五年正月「庄川七口用水役高・小矢部川用水役高」高畠文書 高岡市立中央図書館蔵
- 文政十二年三月「庄川七口水高井山田川筋覚 専勝寺村豊蔵」大浦清左衛門記録 井波図書館蔵井波町史資料
- 但し、これら諸史料の数値はほとんど違いがない。内容的には享保年間の段階で固定化されてきたようである。
- (3) 佐伯安一「近世初期における庄川扇状地野尻川跡の開発」『砺波散村地域研究所研究紀要』第15号 平成十年三月
- (4) 『越中古文書 四六頁(武部家文書) 桂書房 平成三年 人名は寛永頃の

人なので「申五月」は寛永九年と特定した。

- (5) 「承応明暦年間改作築堤等三代又兵衛日記」川合文書 富山大学附属図書館蔵(砺波市史資料編2近世二八六頁)
- (6) 「諸留覚書第一」川合文書 富山大学附属図書館蔵(砺波市史資料編2近世二八七頁)
- (7) 『富山県史通史編古代』六二二頁
- (8) 『富山県史史料編中世』二五四頁
- (9) 高畠文書 高岡市立中央図書館蔵、高岡市史料集、第21集所収高岡市立中央図書館)
- (10) 『庄川合口水史』三八八頁
- (11) 坪野村史編集委員会『坪野村史』井波町坪野地区自治会 平成二年九月
- (12) 『井波町史上巻』四四八頁
- (13) 『庄川合口水史』三八五頁
- (14) 庄川沿岸用水歴史冊子編さん委員会編刊『砺波平野疎水群庄川沿岸用水』平成二十一年三月

近世が紡ぎ出す中世 城端善徳寺の由緒整備

松山充宏

- 一 はじめに
- 二 善徳寺の御坊化
- 三 善徳寺由緒の変遷

- 四 崇敬対象としての確立
- 五 まとめ

一 はじめに

中世以降、越中には浄土真宗の大寺院が多く存立していた。中でも御坊と称された大寺院として、勝興寺（高岡市伏木古国府）・瑞泉寺（南砺市井波）・善徳寺（南砺市城端）がある。いずれも、真宗の信者であれば、直接その寺の門徒であるかないかを問わず、崇敬の対象とされてきた。

現在この三か寺の由緒略記をみると、いずれも浄土真宗の祖師ゆかりの聖地を称している。しかしながら、その伝承と、寺の内外に伝えられてきた中世史料が語る史実との微妙な差が往々にしてみられる。

本稿は、近世の真宗寺院が、中世における寺草創期の情報を再発見、または拡張し、寺院由緒として再編する過程を整理し、こうした由緒の整備が、寺院運営にどのような効果をもたらしたのかを探る。

検討の対象として、近年調査が進められ、多くの成果が公表されて

いる善徳寺を選んだ。

二 善徳寺の御坊化

（一）善徳寺の創立と移転
城端善徳寺は、東本願寺（京都市下京区・真宗本願）を本山とする真宗大谷派に属する。室町時代に加賀国河北郡砂子坂（金沢市）で開かれ、越中国砺波郡法林寺村（南砺市）、同郡山本（同市）、天文年間（一五三二～五五）に福光（同市）、永禄年間（一五五八～七〇）に城端へ入り、現在に至ると伝えられている。

本願寺―一世顕如が織田信長と戦った石山合戦（一五七〇～八〇）に際し、顕如の子で後継者と目されていた教如は徹底抗戦を主張した。このとき善徳寺住職の顕証院空勝は教如を支持した。

石山合戦の戦後処理をめぐる顕如と対立した教如は、越後上杉景勝

との連携を模索しながら中部地方の山岳地帯を転々とし、天正一〇年（一五八二）春に五箇山まで下向し、善徳寺にも一時滞在した。⁽¹⁾

天正二〇年（一五九二）顕如が没し、教如は本願寺留守職を継承したが、豊臣秀吉は教如を隠居させ、弟の准如に安堵した。これにより、秀吉から越中支配を任されていた前田利長も准如方を支持し、越中の本願寺系大寺院であった勝興寺および瑞泉寺も准如方を支えた。

しかし徳川政権が成立すると、徳川家康が教如を支持したため、准如の本願寺（西本願寺）から教如の東本願寺が分立し、利長も教如方と親近関係構築に意を用いるようになった。⁽²⁾ 慶長九年（一六〇四）、利長は善徳寺に二泊し、寺屋敷地を寄進した。その後も、加賀藩重臣の娘が善徳寺住職の正定院因勝に嫁ぎ、藩主前田斉泰の庶子が善徳寺住職として入寺した。⁽³⁾

（二）触頭となる善徳寺

慶安元年（一六四八）、前田家の寺社統制により、善徳寺は越中における東本願寺（教如）系末寺・門徒を統括する触頭とされた。江戸初期当時の善徳寺は勝興寺・瑞泉寺と比べて寺院としての規模は大きくなかった。その理由は両寺に比べて越中入国が遅かったためとみられる。善徳寺が触頭とされたのは、教如と空勝の協力関係に基づき、東本願寺と善徳寺の間に形成されていた親近感に由来するものである。

ところが、慶安二年になると西本願寺（准如）系であった井波瑞泉寺が同系の勝興寺と対立して東本願寺系に転じ、承応二年（一六五三）には善徳寺とともに東本願寺系の触頭となった。触頭は末寺と本山の間を取り持ち、藩からの布達を末寺へ伝えるなどのまとめ役である。

三 善徳寺由緒の変遷

（一）変遷する内容

江戸時代以降、善徳寺はたびたび由緒を作成している。ところが、その内容は時代を追って大きく変遷を遂げている。特に大きく変更されているのは、善徳寺創始者である開基や、開基の年代である。これらですでに翻刻公開されている史料を、時代順に提示しよう。

A 享保年間（一七一六～一七三六）ころ「三州寺号帳」⁽⁴⁾

本願寺五世緯如ノ玄孫実円 文安二年建立、慶安二年微妙院様ヨリ先寺顕勝工当国惣録被仰付、年頭御目見被仰付、其後於加州金沢寺屋敷拝領、末寺相建、

B 元文三年（一七三八）ころ「善徳寺系譜」⁽⁵⁾

廓龍山善徳寺開基者、本願寺五世緯如上人之三男玄真之孫運真也、
未来由者緯如上人之三男玄真諱周寛、為利物化導之、出花洛、下向于越前、始住吉田郡大谷矣、又住志比庄荒川立一寺、号華蔵閣、産男女十三人矣（中略）、抑当寺建立文安元年、運真始而住加州河北郡井家庄砂子坂、而立一寺譲於実円、号善徳寺二位矣（中略）、初世実円字玄広、止住法林寺南麓山本里（中略）大永七丁亥二月廿五日葬于此山、有御墓也、

C 宝曆九年（一七五九）一月「廓龍山善徳寺譜略日記」⁽⁶⁾

本願寺第五世緯如上人之三男玄真諱周寛之孫運真者、為辺鄙化導、出花洛、下向于越前、始住吉田郡大谷矣、又住志比庄荒川、立一

寺、号華威閣。産男女十三人矣（中略）、夫三男永存住持石田而産四男二女室法名女袴、存如上人御女、嫡男蓮真字玄永住岡崎、産三男三女（中略）三男実円号善徳寺（中略）、実円字玄広、止住法林寺南麓于山本ノ里産、（後略）

D 享和元年（一八〇一）二十四輩順拝図会 卷之三

加賀の国二侯の宿より越中福光を経て行程八里城端にあり、此道より越中に入るには俛梨伽羅峠を越へず、三里難所といふ菓研のごとき谷間を通行す、大難所の泥路なり、当寺は本願寺第八世蓮如上人文明三年越前吉崎に御在住の砌草創あり、

E 享和二年（一八〇二）善徳寺一寺にて頭寺相勤候様願状写⁽⁷⁾

城端善徳寺義八、文明年間蓮如上人開基、其後文亀永正之頃より加賀能登越中三ヶ国一宗之寺庵不残支配仕候、（後略）

F 文化三年（一八〇九）四月、両寺并触下寺庵由来書帳⁽⁸⁾

一 当寺開基者、本願寺五世綽如上人之三男周覚法印与申僧、北国致経廻加州砂子坂村二建一宇罷在候、然所嫡孫蓮真与申僧、越前岡崎照護寺之任職ニ候処、病氣ニ付辞照護寺之任職、其節蓮如上人越前吉崎住居故、則吉崎江相移罷在候之処、右蓮如上人より被指下候ニ付、加州砂子坂村周覚之旧跡ニ罷在候得共、依多病嫡男実円江相讓申候、就中謂所有之遺書ニ付、実如上人より加越能三ヶ国門徒之分可為善徳寺門徒之旨直書賜、并家老添状等于今所持仕候事。

G 文化十一年（一八一四）ころ、越中城端御坊略縁起⁽⁹⁾

抑越中城端善徳寺八本願寺第八世蓮如上人ノ草創ナリ、（中略）玄永法師ヲ召寄ラレ、名ヲ蓮真ト賜ハリ、善徳寺相統アルヘシト在テ上人ハ吉崎ニ還リ玉フ、爾レハ初世定聚院蓮真法師八実ニ永存法師ノ嫡男、御母公八蓮如上人ノ御妹君法名如祐禪尼ニテマシマス、第二世実円法師（後略）

H 文化十一年（一八一四）ころ、越中州岡崎御坊善徳寺真調記⁽¹⁰⁾

月輪関白善上殿兼実公御内ニ御家来金森左膳ト申侍有リ、（中略）日々聖人ノ御化導ニ預リ、近江越前加賀越中ト御供仕（中略）受誓坊ト法名下サレ（中略）越前ノ国四位ノ庄荒川村ニ小庵ヲ結フ（中略）是則城端御坊先祖コレナリ（後略）

I 嘉永二年（一八四九）ころ、城端善徳寺由緒略書⁽¹¹⁾

開基本願寺第八世信証院殿蓮如上人也、文明年中信証院殿北陸御経廻之砌、加州河北郡伊賀庄砂子坂村周覚法印草庵之旧地ニおゐて建立在之、蓮真法印江御附属之御事（中略）第二世定聚院蓮真法印、（後略）

J 安政二年（一八五五）上檀間日記⁽¹²⁾

当御坊の儀は、信証院様御開基の儀に御座候（後略）

(二) 模索される開基変更

前項で掲げた史料の開基を整理すると、大きく三つの時期に分類でき

る。

開基を実円（本願寺五世緯如の玄孫）とする時期（史料A）

史料Aでは開基年が文安二年（一四四五）、開基の実円が本願寺五世緯如の玄孫と記される。本史料の成立に先立つ延宝二年（一六七四）に善徳寺が加賀藩へ提出した由緒書上もほぼ同様の内容である。つまり、江戸前期を通じて、善徳寺自身が開基を実円としていたことが確認できた。

しかし、実円は大永七年（一五二七）に没したとされているため、年齢面から文安年間（一四四四～四八）に善徳寺を創立できたとは到底考えられない。つまり、中世善徳寺の伝承が、近世善徳寺へ正確に継承されていない、つまり由緒伝来の断絶という事実がここに明らかとなる。

延宝二年の由緒書上加賀藩へ提出されたころ、善徳寺住職采興院玄勝に後継を欠く状態が続いていた。宝永元年（一七〇四）東本願寺一六世一如の次男である聞光院一玄が善徳寺住職として迎えられた。そして同三年（一七〇六）に善徳寺は御坊へと昇格を遂げることとなる。⁽¹⁴⁾

御坊には本山安置の親鸞座像を等身かつ正面に写した影像が下付される。これは、門徒が「御開山様（＝親鸞）」とより深く結縁することが可能な宗教施設となったことを意味する。正徳三年（一七二二）、井波瑞泉寺も御坊となり、善徳寺と競合関係が続けることとなる。⁽¹⁵⁾

開基を実円の前世代で模索する時期（史料B～H）

開基を変更しようとする動きを最初に示したのは、一玄の子である至徳院真誓（諱は性辰、元文元・一七三六年就任、寛延四・一七五一年三月示寂）のときと考えられる。真誓の就任後に作成されたとみられる史

料Bには善徳寺の開基が蓮真、初世（初代）が実円という、あいまいな記述が初めて確認できる。

寛保二年（一七四二）、真誓は善徳寺草創期の系譜を含む中世本願寺系図である「日野一流系図」の書写を終え、その奥書に「廓龍山第十三世性辰」と署名した。⁽¹⁶⁾この主張に従えば、それまで善徳寺開基とされてきた実円は第三代、第二代は実円の父である定聚院蓮真、初代は蓮真の父である西光寺永存（興行寺周覚の三男）という順にさかのぼることとなる。しかし、江戸時代を通じて永存を善徳寺開基とする史料はないため、このとき真誓は永存開基という構想を持っていなかったと考えられる。

このとき真誓が意図した開基は、史料Fなどで記されているように、蓮真を加賀砂子坂へ指し下した主体とされた蓮如とするのが妥当であろう。寛延二年（一七四九）五月に真誓のもとで作成された善徳寺の由緒書は史料Fとほぼ同じ内容である。⁽¹⁷⁾

おそらく、真誓は近世初頭段階ですでに善徳寺自体が失っていた草創期の系譜情報を「日野一流系図」の書写を通じてようやく再確認することができたと考えられる。

木越祐誓は、善徳寺が蓮如開基を本格的に主張し始めたのは江戸後期としている。⁽¹⁸⁾ところが、これらの史料から、蓮如開基説へ移行する動きはすでに江戸中期から始まっていたことが分かる。

それでは、蓮如開基説を始動させた真誓はどのような住職であったのだろうか。家柄から見ると、東本願寺一六世一如の孫という立場にあり、東本願寺一七世真如の猶子として善徳寺の住職となっている。そして、真誓自身は東本願寺に属する僧侶の中で最高の資格にあたる「巡

讚」の礼遇を与えられている。⁽¹⁹⁾

真誓の由緒整備作業の結果、善徳寺がその後作成した由緒（史料C、E、F、G、I、J）から実円を初代とする記述は完全に見えなくなる。

しかし、真誓の蓮如開基構想は、善徳寺の外部に普及しなかった。それは善徳寺と競合していた井波瑞泉寺が寛延四年（一七五二）ごろまとめた善徳寺の由緒書に実円の開基と記していることから分かる。⁽²⁰⁾

それどころか、善徳寺所蔵の真誓自身の御影（肖像）の題箋に「拾五代目 至徳院殿」、真誓の子であり善徳寺を継承した欣求院真勝（寛延四・一七五二）年就任、明和元・一七六四年一〇月示寂）の御影題箋に「十三代目 欣求院」、その跡を継いだ横超院真心の御影題箋に「拾四代目 横超院殿」と記されている。⁽²¹⁾

真誓の蓮如開基構想は、当時の善徳寺内部でも受容されなかったものの、蓮真まで一世代さかのぼらせることに成功したのである。

しかし、寛政三年（一七九二）九月、横超院真心が示寂すると事態は一変する。善徳寺は嘉永二年（一八四九）まで無住となり、役寺と呼ばれる付属寺院五か寺による管理が行われることとなった。⁽²²⁾

住職の長期不在は、善徳寺の求心力を低下させ、井波瑞泉寺の台頭を許すこととなった。享和二年（一八〇二）ごろ、瑞泉寺は善徳寺と月代わりで勤めた触頭を独占しようと東本願寺へ運動を開始した。これを聞いた善徳寺側は驚き、これを阻止するための加賀藩あて訴状案（史料E）を次のように作成している。

城端善徳寺義八 文明年間蓮如上人開基、其後文亀永正之頃より加

賀能登越中ニヶ国一宗之寺庵不残支配仕候（中略）其後本山蓮枝間光院殿善徳寺江入院、同蓮枝誠諦院殿瑞泉寺江入院、御用月替ニ相勤メ善徳寺筆頭ニ御座候（中略）近頃八瑞泉寺而巳筆頭ニ相成申候、然処天明年中京都大火ニ付、本山類焼仕、再建中ニ相成候処、井波門徒共、当時過半富家共多有之故、品々工夫仕、瑞泉寺より越中者勿論加能両州迄も金銀等取集本山江相運び東六条役人江も金銀等を以賄仕候ニ付、本山表首尾能相成候故、品々相工、金銀等多取集本山江茂相運び、且瑞泉寺も広大花美之普請仕、鷹司閤白様御舎弟正君御方本願寺御門跡為御養弟瑞泉寺住職被仰付候様取組（中略）且又、石動山天平寺与馴合、瑞泉寺義後小松院之勅願所与申立、弥権威を相募、瑞泉寺一ヶ寺ニ而頭寺相勤、善徳寺頭寺差除候様本江山江相願候義承之申候（中略）弥往古之由緒取失、善徳寺相続も無覺束奉存候間、何卒往古之通善徳寺一ヶ寺ニ而御用相勤候様、御国方より被仰付候様偏奉願上度候（中略）

享和三年七月

右趣意相調、七手衆寺社所へ内分迄ニ而表立出シ不申候得共、為心得写置候事、
〔善徳寺一寺にて頭寺相勤候様願状写〕⁽²³⁾

当時の瑞泉寺は東本願寺再建のため多額の寄進を集めたほか、鷹司家の庶子（朗寛）を住職に迎え、堂宇を整備し、後小松天皇勅願所という權威を申し立て、藩を軽視し、善徳寺を排除しようとしていると批判し

たうえで、逆に瑞泉寺を触頭から外し、慶安元年以前のように善徳寺だけが触頭を務められるようにしてほしいと述べている。

こうした危機感を背景に、善徳寺内部では、真誓が主張した蓮如開基説を強調して主張することとなったと考えられる。

善徳寺が問題視したのは、それまで善徳寺の開基とされてきた実円・蓮真と本願寺門主との間に開いた世代の差であろう。たとえば実円は、本願寺五世緯如の三男である興行寺周寛の曾孫にあたる。だが、次世代の本願寺の門主家からみれば傍流である。

中世の史実はどうであれ、格式というものが高い実効性を持つ前近代の寺院社会にあつて、本願寺門主たる緯如が開いた瑞泉寺と、その傍流子孫が開いた善徳寺という構図は、善徳寺にとって受容しがたいものであつたと考えられる。

本願寺門主が開いた瑞泉寺に対抗するには、善徳寺もまた、本願寺門主の開基という由緒を編み上げる必要に迫られたと考えることができるだろう。ここで、真誓が構想した蓮如開基説を再び取り上げて強調することによって、瑞泉寺と同格の名刹という構図を打ち出すことに有効であることはいつまでもない。

この蓮如開基説広報策の一環と考えられるのが、無住期における宝物弘通（出開帳）である。文政五年（一八二二）、善徳寺は能登で蓮如自画・真筆という宝物の公開を行つたなど、各地でたびたび弘通を実施している。⁽²⁴⁾木越祐馨は、善徳寺がこうした行動を通じて北陸各地の門徒へ拝観させ、特に蓮如との由緒を強調して浸透させていったと指摘する。⁽²⁵⁾

また、無住期における霊宝の収集にも注目したい。文化十一年（一八一四）、善徳寺では親鸞五五〇回忌法要が行われた。このとき大納言四辻

公説（一七八〇―一八四九）は「御内々ノ由縁之有ルニ依リ、善徳寺へ親鸞像および伝法然筆六字名号を寄進した。現在の善徳寺虫干法会で披露されるこの親鸞像（都お別れの御木像）の縁起には、四辻家が親鸞と交流のあつたという九条兼実との縁故があるから寄進したという理由が記されている。⁽²⁶⁾しかし四辻家は三条流西園寺家の分家であり、近世でも九条家の門流ではなく近衛家の門流に属していた。まして、東本願寺および無住の善徳寺と四辻家との血縁はまったく見出せない。この一件は、むしろ善徳寺による法宝物収集が広範囲に行われていたことをうかがわせる。

文化十一年段階の善徳寺所有法宝物三二件を見ると、親鸞関係八件、蓮如関係六件、教如関係五点の順に多く、⁽²⁷⁾その後も蓮如筆「屏風隠の名号」⁽²⁸⁾ほか増加が確認できるため、収集・寄進受納が続いたことが分かる。この動きは、無住期の善徳寺が、権威や由緒を補完するため、神秘的強い法宝物の収蔵増加を推進したものと評価できる。

善徳寺の蓮如開基説浸透に大きな契機となつたのが、享和元年（一八〇一）の史料D『二十四輩巡拝図会』刊行である。同書で善徳寺は蓮如開基寺院として取り上げられた。同書の編者である河内専教寺了貞は実際に現地へ赴き、取材を行つた成果を執筆し、特に蓮如関係の事跡を多く採集したという。⁽²⁹⁾つまり、このころ善徳寺が主張していた由緒を、了貞が記述したことが分かるのである。史料Gは木版の刷り物であり、一九世紀初めには善徳寺がこうした略記を版行・頒布して蓮如開基説の周知に努めていたことがわかる。その結果、善徳寺は書籍という媒体を通じて、蓮如開基説を普及し、既成事実としていくことに成功したといえる。

『二十四輩巡拝図会』での善徳寺紹介は、後述する寺基の整備を経て多くの参詣者の受容が可能となったことを広報する効果もあった。この『二十四輩順拝図会』の刊行は、各地の門徒に善徳寺ほか真宗史跡の情報を提供し、娯楽が少ない時代の大きな楽しみであった旅行をますます促した。文化二年（一八一五）五月、砺波郡中村（南砺市川上中）の住人である次郎七が二十四輩巡拝の旅へ出発したが、その最初の訪問先として善徳寺を選んでいる⁽³⁰⁾ことから、その浸透ぶりがつかえる。

開基を蓮如（本願寺八世）とする時期（史料Ⅰ・J）現在）

嘉永二年（一八四九）、加賀藩主前田斉泰庶子の前田亮五郎（速成院達亮）が善徳寺の住職として入寺し、永い無住状態が解消された。このとき善徳寺が加賀藩からの問い合わせに対して提出した由緒が史料Ⅰである。ここで善徳寺はついに開基を蓮如、二代を蓮真、三代を実円という構図を加賀藩に対して公言し、藩もこれを受容した。これは善徳寺が藩主庶子にふさわしい寺院であるという権威を創出する絶好の機会でもあった。

木越祐誓は、安政二年（一八五五）に善徳寺で執行された蓮如三五〇回忌法会のさい、善徳寺が越前国吉崎と東本願寺を往復していた蓮如御影の写しを下付するよう東本願寺へ要望し、先例がないにもかかわらず実現したことに注目し、蓮如の回忌法要は蓮如の善徳寺開基を記念する性格を持ったと述べる⁽³¹⁾。これはすでに善徳寺の蓮如開基説が既知の事実とされ、本山東本願寺も追認したことにほかならなかった。そして、蓮如による善徳寺開基説は現代へ引き継がれている。

四 崇敬対象としての確立

（一）堂宇の整備と城端騒動

至徳院真誓は、蓮如開基説の主張を始めるのと平行して、善徳寺堂宇の整備にも着手している。その動きは次の欣求院真勝の代まで続いた。江戸前期の絵図を見ると、善徳寺本堂は間口三間、五間または少しこれより大きな建物であった⁽³²⁾。御坊となった善徳寺は、より大型の本堂・山門・鐘楼などの建設を一八世紀半ばから始めたのである。

だが、善徳寺は富裕な門徒が少ないため、寛保二年（一七四二）前後から諸国への浄財勸募が本山に対してたびたび申請し、工事も長年にわたったという。この動きはこれまで善徳寺の困窮を示すとされてきた⁽³⁴⁾。しかし実態はどうであったのだろうか。

善徳寺の経済基盤はもろろん門徒である。元禄六年（一六九三）に善徳寺を取り巻く城端町六八九軒のなかで善徳寺門徒は一六〇軒、全体の二三パーセントであり、とても多いといえる。また元禄六年当時の城端に二〇〇年以上居住してきた世帯は約六〇軒存在し、その多くは有力商人や町役人を勤めていた。この旧家六〇軒のなかで善徳寺門徒は町年寄の東上町野尻屋新右衛門を含め一八軒あり、三〇パーセントを占める⁽³⁵⁾。この数値を見る限り、善徳寺が経済的に不安を抱えているとは考えにくい。むしろこの浄財勸募事業は、諸国の門徒に広報して御坊の権威を示す大型堂宇建立を企図したためと再評価したほうがよいのではなからうか。

等身御影を下付された御坊とはいえ、当時の善徳寺住職の権威はいまだ確立されていなかった。その実情は、欣求院真勝が遭遇した事件からうかがえる。その事件とは、宝暦七年（一七五七）に城端でおきた打ちこわし事件「城端騒動」である。

善徳寺御院主御出向、強御宥被成候へト、聞入申さず、却テ悪口放逸之体ニ付、御引返し被成候、

〔荒木旧記〕⁽³⁶⁾

城端を襲つた暴徒を前に、真勝が説得を試みたものの、暴徒らはなんと真勝を罵り、收拾は不調に終わったのである。門主家に連なり、父真誓と同様に東本願寺で最高の僧侶の格式である巡講を許されていた真勝にとつて、この一件はまことに痛恨の極みであつただろう。

城端騒動が收拾されたのち、善徳寺本堂が真勝の主導で宝暦九年（一七五九）に竣工した。この年は「日野一流系図」の情報を反映した史料「廓龍山善徳寺譜略記」も著された。そして同一二年（一七六二）に行われた善徳寺の親鸞五〇〇回忌法会のありさまは、次のように記録されている。

隣国加越能ニケ国八不及申、越前越後ヨリ参詣之者モ有之、当所へ入込申群集夥キ事ニ候、然シ御始末静謐無難ニ御満座被成、当所建始以来是程之群集繁盛之形勢ハ無之事ニ候、

〔荒木旧記〕⁽³⁷⁾

この史料は、目に見える巨大な堂宇である本堂竣工を契機に、善徳寺が門末關係を超えた崇敬対象という地位を獲得したことを示す。

(二) 恒常参詣人数の確保

そして、善徳寺がこの地位を一時的なものでなく、その後も恒常的に維持していったことを示す資料が善徳寺境内の茶所に残る。それは、天明元年（一七八一）に鑄造された金銅製茶釜である。⁽³⁸⁾これは、これは恒常参詣人数が増加し、茶所での茶湯接待が増加したことを意味する。現在も善徳寺では毎日二回の法座も含め、年間約七五〇〜八〇〇回の法座が行われる。木場明志は善徳寺関係者の言として「常日頃から絶えず、こ門徒と接し、こ門徒と人間的な關係を取り結んでゐることこそが真宗同朋を目指す寺の唯一のあり方である」とする。⁽³⁹⁾

城端御坊善徳寺の權威が安定する画期は、諸国門徒が群参したという宝暦九年の大型本堂の上棟という、御坊の權威が目に見える形で具体化したときであると考える。そして、このとき整備された建物は今も用いられている。

(三) 虫干法会の実施

元治元年（一八六四）には親鸞六〇〇回忌法会が善徳寺で行われ、事前に法会の予想図の刷り物も出された。⁽⁴⁰⁾このように、江戸末期まで善徳寺が重ねてきた權威の構築は、当然ながら莫大な費用をその見返りに求めることとなる。大村忍の整理によれば、善徳寺は江戸後期には莫大な債務があり、加賀藩から借銀を行つてゐる。⁽⁴¹⁾

明治三年（一八九〇）東本願寺前門主殿如は、城端別院護持を依頼する消息を門徒へ発し、明治維新以後混乱していた善徳寺の経済基盤整備の契機となつた。善徳寺はそれまで寺の日常的護持を支えてきた講組織を基礎に、殿如消息と法宝物の披露を各地で行つ巡回布教を始めた。⁽⁴²⁾

明治二年（一八九六）、善徳寺は所蔵の法宝物を公開し絵解きなどを

行う虫干法会を毎年七月に行うこととした。⁽⁴³⁾

現在の虫干法会では、本堂で木造蓮如坐像の縁起読み上げと開帳軸装された蓮如絵伝の絵解きが行われ、ついで他の宝物開帳が他の堂で行われる。これは蓮如開基を強調する行為であり、太子信仰を前面に打ち出す瑞泉寺との差別化を図ったものである。⁽⁴⁴⁾ 参詣者は蓮如ゆかりの宝物を眼にすることで、蓮如の神秘性を追体験したと想像される。

善徳寺の虫干法会には、一九七〇年代まで砺波・五箇山地域から毎年一万余人が参詣した。⁽⁴⁵⁾ この人数は、親鸞が同行・同朋と呼んだ真宗門徒相互の連携により達成されたものである。現在の善徳寺虫干法会でも、門徒らが誘い合い参詣する団体参拝は多く、参詣者の多くは富山県内在住者で、五割が善徳寺を信仰対象とする門徒、三割が虫干法会に伴う催事を見ることを目的に訪れているとい⁽⁴⁶⁾。

虫干法会のお斎(食事)として二〇〇〇食が振舞われるサバの熟れ鮓は、五月中旬から善徳寺鯖ずし講によって漬けられる。海から離れたこの地の人々に好評で、酷暑を乗り切るために必須な食という意識があった⁽⁴⁷⁾。

五 まとめ

勝興寺や瑞泉寺に比べ越中入国が遅かった善徳寺は、本願寺の東西分派期に教如と空勝が構築した親近関係を基礎に、数多くある一家衆寺院から御坊へと寺格を上昇させた。そして一八世紀以降は聖性を強調した由緒整備を推進し、門末を超えて浸透させていく。そしてついには本山・加賀藩へも整備後の由緒を追認させた。合わせて宝物・施設も着実に整備拡充する努力を重ねた結果、近世善徳寺は勝興寺・瑞泉寺に比肩

する權威を獲得した。

こつして城端善徳寺は宗教の聖地⁽⁴⁸⁾として確立したのである。

注

(まじやまみつひろ 富山民俗の会会員)

- (1) 城端町史編集委員会編『城端町の歴史と文化』以下、『城端町の歴史と文化』と略す、同町教育委員会、二〇〇四年、二八四頁。
- (2) 松山充宏、近世幕藩体制に依存した本願寺の門徒再編、『富山史壇』一四七号、二〇〇五年。
- (3) 木越祐馨『江戸時代の善徳寺』、城端別院善徳寺蓮如上人五百回御遠忌記念誌編集委員会編『城端別院善徳寺史』以下、『善徳寺史』と略す、三二一―三七頁。
- (4) 金沢大学法文学部内日本海文化研究室編『加越能寺社由来』上(以下『加越能寺社由来』上と略す)、石川県図書館協会、一九七四年、七〇頁で翻刻。
- (5) 富山県史編纂委員会編『富山県史』史料編 中世、富山県、一九七五年、付録 古記録 一五六頁で翻刻。成立年代の比定も同書による。
- (6) 『善徳寺史』二〇二頁で翻刻。
- (7) 『善徳寺史』二〇七頁で翻刻。
- (8) 『加越能寺社由来』上七一―六頁で翻刻。
- (9) 富山県立図書館蔵。
- (10) 『城端町の歴史と文化』資料編四〇一頁で翻刻。本史料は親鸞五五〇回忌に合わせて善徳寺へ四辻家から寄進された親鸞像について記述があるため、文化一一年ころの成立とみられる。内容は、九条兼美の家臣である金森左膳が親鸞の弟子となって受誓坊を称し、越前国四位庄荒川村に住んで善徳寺の祖となったこと、延慶元年(一三〇八)に寛から善徳寺号を下付されたこと、嘉吉年間(一四四一―四四)に越前から加賀へ移転し、文明四年(一四七二)に蓮如の downward を受けて親鸞御影を下附されたとする。親鸞五五〇回忌に対応して善徳寺と親鸞との関係を強調

- し、蓮如創建説を唱えていない点は注目される。本書は、江戸後期の善徳寺が、親鸞開基説を主張しようとする計画していた可能性があることも示している。
- (11) 『善徳寺史』二〇三頁で翻刻。
 (12) 『善徳寺史』五九頁で翻刻。
 (13) 善徳寺文書「善徳寺由緒書上」。富山県公文書館蔵「善徳寺文書」写真帳一四三九による。
 (14) 前掲史料B「善徳寺系譜」。
 (15) 木越祐馨「江戸時代の善徳寺」、善徳寺史、三九頁。
 (16) 善徳寺文書「日野一流系図(写)」。山下宗八「教如上人と空勝僧都」、城端別院善徳寺、一九六七年、四頁で翻刻。
 (17) 善徳寺文書「当寺由来書帳」。富山県公文書館蔵「善徳寺文書」写真帳一五八による。
 (18) 木越祐馨「江戸時代の善徳寺」、善徳寺史、五六頁。
 (19) 太田浩史「三心釈聞記(善徳寺蔵)の背景」、城端町の歴史と文化、四二―四三頁。
 (20) 瑞泉寺文書「善徳寺由来」。富山県公文書館蔵「瑞泉寺文書」写真帳一一二による。
 (21) 南砺市教育委員会編「善徳寺歴史資料調査報告書」、同委員会、二〇一〇年、二九頁。
 (22) 木越祐馨「江戸時代の善徳寺」、善徳寺史、四六頁。
 (23) 『善徳寺史』二〇七頁で翻刻。
 (24) 富山県教育委員会編「城端別院善徳寺史料目録」所載「寛政十一年四月御坊宝物弘通願案」。文政五年三月、蓮如上人自画・真筆の宝物修覆に付同行の拝礼許可願」等による。
 (25) 木越祐馨「江戸時代の善徳寺」、善徳寺史、五八頁。
 (26) 「城端御坊舊事記」、善徳寺史、二二三頁で翻刻。四辻家との関係を記した「宗祖大師御真影縁起」は「善徳寺史」二二四頁、「御袖籠御名号縁起」は「善徳寺史」二二八頁でそれぞれ翻刻。
 (27) 「城端御坊舊事録」、善徳寺史、二二三頁で翻刻。
 (28) 前掲「城端御坊舊事録」と「善徳寺歴史資料調査報告書」二四五頁所載の書跡目録を比べると、現在も虫干法会で掲げられる「屏風隠れの名

- 号」や、砺波郡中河内村(南砺市、一九六七年に刀利ダム建設に伴い廃村)から移された「大蛇濟度の名号」、また境内の蓮如腰掛石など、最近まで新たに加わった霊宝が確認でき。
- (29) 細川行信「二十四輩順拝図会」解題。真宗史料集成、第八巻、同朋舎、一九七四年、三五頁。
 (30) 『井口村史(同編纂委員会、一九九二年)』下巻史料編三五九頁所載「親鸞聖人二十四輩順拝記(南砺市個人蔵)による。なお、嘉永三年(一八五〇)に砺波郡梅原村(南砺市梅原)の武助も同様の二十四輩巡拝を行っていることが、井口村史」下巻史料編三七五頁所載「親鸞聖人旧跡巡拝につき往来切手(南砺市個人蔵)からも分かるため、江戸後期に越中でも二十四輩巡拝が流行していたことをつかがわせる。
 (31) 木越祐馨「江戸時代の善徳寺」、善徳寺史、五七頁。
 (32) 土屋敦夫「城端善徳寺の諸建築と絵図」善徳寺史、八八頁。
 (33) 大村忍「善徳寺と看坊五力寺」、善徳寺史、七一頁。
 (34) 『城端町の歴史と文化』四一―四二頁。
 (35) 『城端町組中人々手前品々覚書帳』。富山県史、史料編 近世中付録所収。
 (36) 『城端町の歴史と文化』資料編三九三頁で翻刻。城端曳山史編纂委員会編「城端曳山史(旧城端町、一九七八年)七〇頁も参照。
 (37) 「荒木旧記」。城端曳山史、四〇八頁で翻刻。
 (38) 「茶所金銅茶釜銘文」、善徳寺史、二三五頁で翻刻。
 (39) 木場明志「法宝物巡回布教」、善徳寺史、二五〇頁。
 (40) 富山県立図書館所蔵。
 (41) 大村忍「善徳寺と看坊五力寺」善徳寺史、七二頁。
 (42) 木場「法宝物巡回布教」、善徳寺史、一六八頁。
 (43) 善徳寺虫干法会は井波瑞泉寺が享保年間(一七一六―一七三六)以後、聖徳太子絵伝の絵解きを伴う太子伝会を始めたといえられ、ここで募財に成功したことを参考にしたと推測される。しかし城端と井波の近隣にある南砺市井口地域・福野地域の人々が、善徳寺虫干法会と瑞泉寺太子伝会を比較して抱く意識には温度差があるようだ。井口村史(同編纂委員会編、一九九五年)上巻四六六頁および、福野町史(通史編)(同編纂委員会編、一九九一年)五六三頁を参照。

- (44) 二〇〇七年から善徳寺虫干法会で聖徳太子絵伝の絵解きも再興された。松山由布子「虫干法会における法宝物の御開帳と縁起拝読」、『城端別院善徳寺の虫干法会』名古屋大学宗教儀礼テクスト研究会編、二〇〇八年）六四頁。
- (45) 阿部泰郎「善徳寺の歴史と虫干法会参詣」、『城端別院善徳寺の虫干法会』一〇頁。
- (46) 蔡佩青が平成一七年（二〇〇五）・同一八年（二〇〇六）に虫干法会参詣者を対象に行った聞き取り調査による。蔡「参詣者の希求 宗教的空間・追憶の時間 聖なる言葉」、『城端別院善徳寺の虫干法会』九八頁。林泰子「虫干法会の御馳走」、『城端別院善徳寺の虫干法会』九〇頁）および中川眸の教示による。
- (48) 昭和三年（一九四八）民藝運動家の柳宗悦が『美の法門』を城端善徳寺で執筆したため、同寺は民藝の聖地と呼ばれている。また平成二〇年（二〇〇八）公開のアニメーション番組「true tears」の舞台となったため、善徳寺と城端の街に多くのファンが訪れる現象も確認されている。ファン自身はこうした行為を「聖地巡礼」と称していて、観光学の視点から研究が蓄積されつつある。アニメ聖地・城端については別稿を予定している。

〔付記〕

本稿は、平成二二年（二〇一〇）四月の射水市新湊古文書の会城端研修会・同市観光ボランティア連絡協議会総会での講演内容をまとめたものです。

富山県公文書館には所蔵写真帳の閲覧についてたびたびお手をかけました。深く感謝申し上げます。

情報収集・調査・執筆にあたり、左記の各位のご協力をあおぎました。末尾ながら厚く御礼申し上げます。

久保尚文、佐伯安一、高嶋幸子、高橋延定、原口志津子、横井啓一

（五〇音順・敬称略）

千光寺土蔵の文献調査

佐伯安一

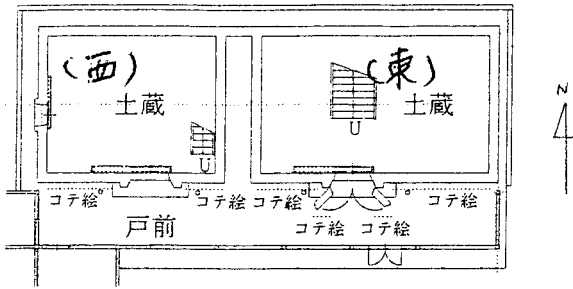
- 一 はじめに
- 二 西蔵

- 三 東蔵
- 四 土蔵戸前

一 はじめに

砺波市芹谷の古刹千光寺（真言宗）の土蔵は境内の西北隅、中庭の北側にある。梁間一間半で桁行三間と四間の二戸前を半間空けて並べ、置屋根を接続して一棟としている。各平入り、二階建てである。位置上、西の三間棟を西蔵、東の四間棟を東蔵とする。戸前および外壁には採色された恵比須大黒・鶴亀（一部に洋風意匠）などの鏝絵が施されている。

平成十六年、富山県の土蔵百選に選ばれ、同二十一年十月二十六



図

日付で砺波市の文化財（建造物）に指定された。指定の際の調査により、棟札や古文書が発見され、西蔵は天明五年（一七八五）、東蔵は文久二年（一八六二）の建築、鏝絵は明治四十二年（一九〇九）小杉の竹内勘吉組の仕事であることが判明した。西蔵の天明五年は建築年のわかるものとしては土蔵百選の中で富山市旧密田家の安永二年（一七七三）について一番目に古い。

建築の調査は別に富山国際職業学院 上野幸夫教授の報告があるもので、ここでは古文書や棟札の文献に基づいた考察を報告しておきたい。

二 西蔵（間口三間×奥行二間半）

天明五年（一七八五）九月上棟 六十三世順遍代

棟梁 宮森村 名越宗次郎

資料 地鎮祭棟札 天明五年三月

上棟式棟札 天明五年九月

千光寺文書 一七六一「米土蔵木材見図り帳」

年欠(天明五年カ)

千光寺文書 一七七六「交割帳・芹谷村千光寺」

嘉永三年十二月

資料 の棟札によって天明五年(一七八五)三月に地鎮祭、九月に上棟式を行なったことは明らかである。資料の「米土蔵、木材見図り帳」は年欠であるが、「根夕(土台)の三間六寸は間口、二間半五寸は奥行きに相当する。角柱(長柱)一三・五尺、下立柱七・五尺、上立柱五・五尺の寸法は二階建ての現状に合つ。よってこの蔵の見図帳とする。資料の嘉永三年(一八五〇)の交割帳には奥行(間口)三間、前口(奥行)二間半と記されている。収納品として仏画などを書いていく。別に小規模な「穀蔵」を記しているから、当初の「米土蔵」を嘉永年間には仏画などの収納蔵に転用していたのであろう。現在は仏像回仏画などは東蔵へ移し、この蔵はふとん蔵となっている。

三 東蔵 (間口四間×奥行二間半)

文久二年(一八六二)建築 六十九世秀禪代(七十世法禪)

大工 高岡大工中町 米田屋利八郎 宮森新村 清次郎

資料 千光寺文書 一七二九「諸職人日記 芹谷山台所」

文久二年

菅野家文書(目録未載)「什宝帳、芹谷村真言宗千光寺」

明治七年十二月

資料 明治七年(一八七四)の「什宝帳」には「道具蔵」として、前口四間×奥行二間半の東蔵が初めて見える。そして、「第七十世法禪代再建」とある。法禪は文久三年(一八六三)住職となり、明治十二年に寂しているから、この記載では文久三年から住宝帳の書かれた明治七年までの間に建つたことになる。この時期に該当する普請帳が二冊ある。

資料の文久二年「諸職人日記」と翌文久三年の「諸職人日記」一七三一である。後者は観音堂の千鳥破風修理であるから土蔵ではない。前者文久二年の分は建築内容は不明であるが、大工三九四人、木挽二三人、他ぬし屋、屋根ふきなどの記載があるから土蔵としてよい。しかし、法禪の入寺は文久三年(十一月後住許可)だから、前住秀禪(九月十三日没)の代になる。これを法禪代としたのは事情がありそうである。法禪は嘉永元年(一八四八)十三歳で秀禪のもとへ弟子入りし、後に太田万福寺の住職を勤めていたが、文久三年、秀禪の死去により、その跡をついだ。しかし、東土蔵の建築も実質的に法禪が担当していたのであろうか。文久三年の春には観音堂の修理もしている。観音堂は一応の修理はしたが、傷みがひどかったので、文久二年に瓦の勧進を始め、四年後の慶応二年(一八六六)に小屋組を改修し、屋根を葺きかえしている。このような流れから、明治七年の「什宝帳」では法禪代と記したものと思われる。なお、この土蔵は「再建」とある。資料の嘉永三年の交割帳には「一、穀蔵、前口吉丈、奥行式間半」として小規模のものが記されているから、これを取り壊して再建したのであろう。

四 土蔵戸前

明治二十九年（一八九六）新座敷建築時 七十一世徳禪代

棟梁 太田村 藤井助之丞

資料 藤井助之丞文書 二四（四）「芹谷山千光寺戸前建図」

（一）（二）「新座敷木口絵図」

明治二十九年四月

東西二棟の土蔵前につけられた一間幅の下屋戸前である。前面は縦格子風の瀟洒なデザインである。

明治二十九年、新座敷の建築の際に改築されたと思われる。資料 新座敷の平面図に戸前の配置が書かれ、同時に「千光寺戸前建図」という姿図も描かれているからである。これによって新座敷前の中庭の周囲は本館後の縁とそれに対する蔵の戸前の三方が整備されたことになる。なお、明治四十二年の鍍絵左官工事の際は一時撤去して作業が進められたことである。

五 壁再塗、鍍絵

明治四十二年（一九〇九）七十二世密禪代

左官 小杉町 竹内勘吉

資料 千光寺文書 外「諸事仮覚帳、明治四十一年一月より、

芹谷山方丈用（明治四十二年九月七日支払）

東西の新旧二棟の土蔵の壁を再塗し、一体として鍍絵を施したものであるが、小杉の竹内左官が塗ったと伝えているだけで、直接の資料はなかった。今回の調査で資料 明治四十一年起の「諸事仮覚帳」の中

で、明治四十二年九月七日に小杉町竹内勘吉左官へ「土蔵壁并採色工料」として九円を支払った記事が見つかった。これで竹内左官の仕事であることが明らかになった。しかし、九円ではいかにも低額である。この帳によると米一石が二円だから一石にも満たない。大工賃が一日四〇銭であるから、九円では二〇人工あまりではない。おそらく何年前からとりかかっている、残りのこの年の分だけ支払ったのではなからうか。ところで、竹内左官というところすぐ名工竹内源蔵の名が出てくるが、源蔵は明治十九年生まれで、この年明治四十二年には二十三歳、翌々明治四十四年に一級漆喰の認定を受けて、源蔵と改名したというから、一人前の職人になる前段階である。とはいえ、源蔵にはこれ以前のしっかりした作品もあるから、本格的に参加はしていたであろう。しかし、ここでは支払先の名とおり、親、竹内勘吉の仕事としておかねばならない。ちなみに、観音堂には竹内勘吉名の漆喰奉納額がある。年不詳であるが、奉納者の芹谷村の人たちの人名からみて、鍍絵の完成した明治四十二年ごろとしても不自然ではない。

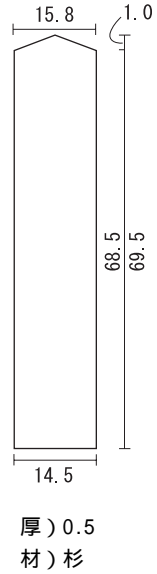
なお、前年の明治四十一年は千光寺にとって大変な年であった。四月末ごろに開帳が行われ、それを目ざして観音堂周囲の土止め石垣工事が行われた。しかもその工事最中の三月に七十一世の徳禪が死去（三月十九日仮葬式）、七十二世密禪（金子氏）が跡を継いで開帳を行った。

（さえきやすかず 砺波散村地域研究所員）

資料

資料 千光寺土蔵西蔵 地鎮祭棟札 天明五年三月

(表)



維時天明第五乙巳載三月如意圓滿日 壹百座 修師

(タラーク虚空蔵菩薩)

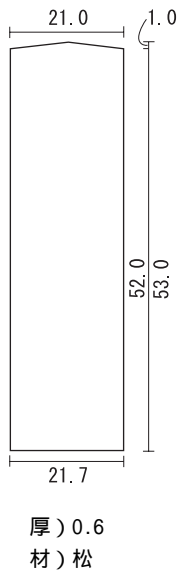
(梵) 奉精修能滿虚空蔵菩薩秘法悉地成就處

於當院瑜伽精舎現住六十三葉之末子 百萬遍 順遍

(裏) 銘なし。下端に「庫」

資料 千光寺土蔵西蔵 上棟式棟札 天明五年九月

(表)



(カーン不動明王)

(梵) 當院六十二葉巡遍代行蔵四十二歳弟子等成辦祈處(五芒星)

(ポローン 金輪仏頂)

(梵) 千光精舎土蔵建立新闢此佳苑為殿宇不朽也(梵字)

(梵) 皆天明第五乙巳九月穀旦 大工宮森邑 名越宗次郎

(タラーク虚空蔵菩薩) 大鋸 重助

與助

(裏)

(バク 勝三世明王)

(ア 胎蔵界大日) 聖主天中天(梵)

(梵) 大梵天王 (ウーン 軍荼利明王)

(梵) 迦陵頻伽聲(梵)

(バン 金剛界大日) (カーン 不動明王)

(梵) 本地毘盧遮那如来 (梵)

(ウ) 降三世明王

(ウ) 金剛菩薩) 哀愍衆生者(梵)

(梵) 帝尺天王 (キリーク 大威徳明王)

我等今敬礼(梵)

(以下真言略)



資料 表



資料 表

資料 (西蔵)

「米土蔵木材見廻り帳」年欠(天明五年力)(千光寺文書 一七六二)

根夕	三丁	三間六寸	三五×五〇
根夕	二丁	二間半五寸	三五×五〇
根夕	二丁	二間	三五×五〇
角柱	十三・五尺		八本
下立柱	七・五尺	四四角	二十五本
上立柱	五・五尺	四四角	二十五本

資料 (西蔵)

「交割帳 砺波郡芹谷村千光寺」嘉永三年(千光寺文書 一七七六)

「一、土蔵 一ツ
前口式間半 奥行き三間
内二納品、左二記ス

(西蔵)

一、仏名本尊
一、涅槃像
(以下略)

一、穀蔵 一ツ
前口 壹丈 奥行 式間半

(東の旧蔵)

資料 (東蔵)

「諸職人日記 芹谷山台所」文久二年正月(千光寺文書 一七二九)

大工 高岡、利八郎	二・一〇三・一六	三四・六人
大工 宮森新、清次郎	二・九〇六・晦日	一七・四人
大工 善四郎	二・五〇七・二一	一八人
大工 善四郎倅金蔵	二・五〇五・九	三七・六十一人
大工 円池村、久次郎	ウ八・一五〇	二二・四人
大工 あら町、源蔵	五・九〇七・三三	六三・六人
木挽 三次郎	二・三〇七・七	二〇人
木挽 六蔵	五・二六〇・六・一四	一四・四人
ぬし屋	六・二〇〇・七・三三	一八・二人
屋根ふき	七・三〇八・一八	三六・四人
壁 与吉	五・二九〇・六・八	一一・四十九・八人

資料 (東蔵・西蔵)

「什宝帳 芹谷村真言宗千光寺」明治七年十二月(菅野文書)

「一、道具蔵 一宇
前口四間 奥行式間半 第七十世法禅代再建
(東蔵)

一、穀蔵 一宇
前口三間 奥行式間半
(西蔵)

資料 (戸前)

- 「新座敷木口絵図」 明治二十九年四月(藤井助之丞文書 二四(一)(二))
- 「芹谷山千光寺戸前絵図」 (" 二四(四))

資料 (壁)

- 「諸事仮寛帳 芹谷山方丈用」 明治四十一年一月起(千光寺文書 外)
- 「七日
- (M⁴².9)
- 一、九円 小杉町竹内勘吉左官へ

土蔵壁 井 採色工料共仕払

砺波散村地域研究所研究紀要 第28号

平成23年3月31日

編集・発行 砺波市立砺波散村地域研究所

富山県砺波市花園町1-78

電話 0763 (32) 2339

FAX 0763 (32) 2436

〒 939-1382

Eメール shiryokan@city.tonami.lg.jp

印刷 株式会社アヤト